

優秀賞

「私の未来は、なに色？」

―目標で手に入れた色―

山口県立山口高等学校3年

北川 舞海

私の今までの人生は、正直言って、灰色のようなはつきり
としない暗いものだった。そのため私は無理矢理に色を混ぜ
て、少しでも明るい色にしようとした。しかし、もがけばも
がくほど私の色は黒ずみ、次第に私は自分を見失っていった。
私は、喘息を小学一年生の頃に発症し、入院した。あの時
の息苦しさは思い出すだけで、気分が悪くなる。そんなに長
期の入院ではなかったが、点滴を一日中つなぎ、息苦しい毎
日が苦痛で仕方なかった。そんな経験があり、入院というも
のが怖くなった。退院後も、運動をすると喘息の発作が出て
しまうため、入院生活の恐怖がよみがえり、運動することが
怖くなった。学校でも家でも、外に出て遊ぶことはほとんど
無くなり、読書をしたり、絵を描いてばかりいた。人とあま
り遊ばなくなってしまうため、性格も内気になってしまっ
た。そんな私は、はじめのいいターゲットで、一年生から五
年生まで嫌がらせを受け続け、不登校になった。

小学校六年生にあがる時のクラス替えを機に学校へ通うよ
うになったが、休みがちで、体育には参加しなかった。運動
すると考えるだけで、息苦しくなるようになったからだ。そ
んな私が中学生になったからといって、学校にしっかりと通
えるわけもなく、再び、はじめのターゲットになり、不登校
になった。その頃から、家族の仲はかなり悪くなった。優し
かった父は私にだけ暴力を振るうようになり、恐怖の存在に
変わった。笑顔が素敵な母は、精神科の病院へ通うようにな
り、隠れて泣くようになった。父方の祖父母は、孫がじめ
めを受けた、不登校だ、というのが嫌だったらしく、私の存在
を否定し、「舞海が不登校になったのは、あんたのせいだ」と
母に文句を言うようになった。家族がどんどん崩れていくの
が分かった。すべて私のせいだと思った。それからは、家族
との関わりも絶ち、自分の部屋に閉じこもるようになった。
誰にも会いたくなかった。

それでも一人っきりの部屋の中で、私に、大好きなものが
できた。ゲームである。最初は現実から逃げ出すために飛び
込んだ世界だった。ゲームの中では、誰でも主人公になれる。
私は色んな世界で、色んな体験をした。そこにはたくさんの
色があった。その色は、私のはつきりしない暗い世界に無理
矢理に混ざろうとするのではなく、今までの暗い世界を、新
しい色で塗り替えていくような、そんな感じがした。沢山の

色をもっと見たいと思うと同時に、私には夢ができた。私もこの世界を、この綺麗な色を作りたい。私の暗い色に、新しい色をくれたゲームを、今度は私が作り、沢山の人に見てもらいたい。

私のその夢は私を不登校から脱却させてくれた。最初は保健室登校から始め、二年生にあがる時に、教室へ戻った。嫌がらせをしてくる人もいたが、不思議と気にならなくなった。何となく生きて、色々な苦痛に耐えるだけの生活の中になつてきた目標は私に勇気を与えてくれたのだ。

その後、高校にも進学したが、家族は不仲のままだった。父方の祖父母との関係も悪いままで、運動のできる弟や従兄弟と、運動のできない私をよく比べた。会うたびに「舞海は、いつ頑張るの？」なんて言われることも多く、父もそれに影響され、私への暴力は収まらなかった。

私が幼い頃、家族は仲が良かったように思う。色々な所に連れて行ってもらい、たくさん遊んでもらった。あの時は私の周りは沢山の色に満ちていた。

高校二年生のゴールデンウィーク、父が失踪した。父は、形式上、父では無くなった。暴力が無くなるということに、安心感はあったが、寂しさも感じた。これで父との関係は切れてしまう。そう考えると涙が出た。恐怖の存在だったが、どうしようもなく私の父はあの人だけなのだ、と実感した。

私は十七年間、慣れ親しんだ苗字を変えた。今だに慣れない苗字を見ながら、私はこれからの人生にわくわくしている。大袈裟かもしれないが、これは私にとって、新しい人生の始まりなのだ。経済的な理由で通信制高校に転学し、アルバイトをする日々は、私に様々な経験をさせてくれる。今まで気にしなかった人との関係、働くことで人を守ること。私の人生はもう、暗い、はつきりしない灰色ではない。

私の未来は、具体的に言えば、光が満ちたような黄色である。私の目標は、見失っていた私自身を取り戻させてくれた。今度は私が私のように灰色の世界に取り残された人達に色を届ける番である。